

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2026年4月25日

賢い人になろう！

「賢くなりたい」というのは、すべての人間に共通する根源的欲望である、と言ったら言い過ぎでしょうか？中には「自分は別にそんなことないけど？」という、へそ曲がりな人もいるかもしれませんが。けれども、生まれる前、神様に雲の上で、「お前はこれから地球という星に人間の赤ちゃんとして生まれることになる。賢い子に生まれたいか、賢くない子に生まれたいか、どっちじゃな？」と聞かれたら、「賢い方でお願いします！」となる人が圧倒的ではないかと思えます。

個人的なことを言うと、年齢を重ねるにつれて、若い頃にもっと勉強して、もっと知識を深めておけばよかったなあ、としみじみ思うようになりました。別にそれで一流企業に入ったり、お金儲けしようとかではありません。例えば、相対性理論が完璧に理解できたとしたら、ドストエフスキーをロシア語の原文で読むことができたとしたら、自分は、今見えている世界とはまるで違う世界を見ていたのかもしれないなあ、と思うのです。世界は人類が累々と築きあげた知の財産に満ちているのに、それらを味わうことなく生涯を終えたらもったいないなあ、と感じるのです。書店や図書館に行って、棚一杯に収まる本の背表紙を眺めていると、まだ自分が読んだことのない本の多さに圧倒されます。この先何年か分からない人生の中で、自分はあと何冊の本を読むことができるのだろうか？と考えることがあります。

4月、新しい学年を迎えた生徒諸君の多くは「よし、今年は今まで以上にがんばるぞー！」という思いでいることでしょう。今回はそんな君たちに、「賢さ」に関わる、ある青年のエピソードを紹介します。歌人の俵万智さんのエッセー『生きる言葉』（新潮新書）からの抜粋です。

〈賢い人って、どういう人？〉

2025年、年明け早々、インタビューの申し込みが舞い込んだ。依頼主は、17年ほど前から、発達障害に関する記事を書いているという朝日新聞の太田康夫記者だ。現在25歳のご長男が、幼稚園の時に発達障害と診断されたのがきっかけで取材を始めたという。

メールには、「十年も前のことで、ご記憶にないかもしれませんが、当時の状況やお気持ちをうかがいたくて」と前置きがある。彼が聞きたいというのは、2015年に、私が X（旧ツイッター）でお気に入り登録した、ある言葉についてだった。

それは米国在住の自閉症の男性・久保渡さんの言葉を、母親である由美さんが紹介したものの。宿題をしながら「僕は賢くなる」と言い続ける渡さんに、「渡、賢い人ってどういう人のことをいうの知ってるの？」と由美さんが聞くと、ただただしく、けれどしっかりと彼は言った。

「笑顔である事。幸せである事。正直である事。誇りを持つ事」

驚きつつ共感した由美さんが、このことをツイッターにあげると、多くの人がリツイートした。それが私のところにも流れてきて「お気に入り」に登録したのだ。由美さんが「お気に入りに登録し

てくださってありがとうございます。息子が喜んでいます」とメッセージをくださり、それに対して私は「大切なことがすべて含まれている素晴らしい言葉だと思いました！」と返信した。

正直、細かいことは忘れていたのだが、メールに当時の由美さんのブログが添付されていて、私とのやりとりも紹介されており、記憶が蘇った。太田さんによると、重い自閉症があり会話が困難な渡さんは、由美さんが知人と開発した会話補助アプリを使って、少しずつ意思を伝える力をつけてきたそうだ。

インタビューを受けながら、あらためて渡さんの言葉について考えたことを、ここに記しておきたい。

まず、「賢い人って？」と問われたら、私たちはたいてい「物事をよく知っている」とか「偏差値が高い」とか「判断力に優れている」とか、そういうことをあげるのではないだろうか。これらは全て外から見たモノサシというか、客観的な評価だ。ところが渡さんのあげた「笑顔である事。幸せである事。正直である事。誇りを持つ事」は、おおむね主観的。いずれも人から見てどうというよりも、自分がどうであるかに重きがある。そこが素晴らしいと思った。

はじめに「笑顔である事」。人間、生きていれば笑ってばかりもいられない。それでも、できるだけ笑顔でいるためには、なにごとにも悪い面より良い面を見つけ、悲観的になりすぎないように心がけることだ。日々を笑顔で過ごせる人には、そういう知恵がある。

次に「幸せである事」。幸せであるかどうかは、まさに主観だ。人からどう見えるかは関係ない。ものごとを前向きにとらえ、小さなことにも幸せを見つけられるのは、真に賢い人だろう。

そして「正直である事」。子どもたちの質問に答えるなかでも触れたことだが(注)、人をだます道具として言葉を使うのは、もったいない。せつかく言葉を用いるならば、互いの気持ちを通い合わせる方向で活用したい。正直であることは、言葉を賢く使うということでもある。

最後に「誇りを持つ事」。これも、とても主観的なものさしだ。誇りを持つとは、つまり自分の人生を肯定するということ。ただむやみに楽天的というのとは違う。自分にも他人にも、恥ずかしくない生き方ができていると感じなければ、誇りはなかなか持てない。確かに、そういう人が賢くないはずがないと思わせられる。

四つとも、たまに立ちどまって、自分はどうかと点検してみたくなるような視点である。噛みしめるほどに深い味わいが、それぞれの言葉のカテゴリーは微妙に違う。笑顔は表情、幸せは感情、正直は人のありよう、誇りは人生を総括するような言葉だ。これだけバラエティに富んだ分野から、なぜ渡さんは言葉を拾いあげることができたのだろう。それは身近に「賢い人」として思い浮かべられる具体的なモデルがいたからではないだろうか。

「お母さまの由美さんじゃないでしょうか」。そう言うと、太田記者は一瞬メモする手を止め、深呼吸するように大きく^{うなず}頷いてくれた。長年取材している人の同意を得て、私の思いは確信に変わった。きっと由美さんは、いつも笑顔で困難に立ち向かい、渡さんとの暮らしが幸せで、ウソをつかず、彼を得た人生を誇りに思っているのだろう。そして渡さんがそう感じているからこそ、出てきた言葉なのだ。

賢い人はお母さん、という一言で片づけず、自分なりに言語化した渡さん。これらの言葉は、彼から由美さんへの最高の贈り物でもあると思った。

「笑顔である事。幸せである事。正直である事。誇りを持つ事」。渡さんのこの言葉については、すでに俵さんが深い解釈をしてくれているので、あえて付け加えることもありません。ただ、こ

れらを人間の「賢さ」に結びつけた渡さんの洞察力というか、本質をとらえる能力には、深く感服します。「笑顔である事。幸せである事。正直である事。誇りを持つ事」。この四つのシンプルな言葉を実践して生きることは、簡単そうに見えて、決して簡単ではありません。いついかなるときも、人生にポジティブなスタンスをとり続けること、それが真の「賢さ」なのかもしれません。

「賢さ」と似た言葉に「知性」があります。『寝ながら学べる構造主義』(文春新書)の中で、著者の内田樹さんは、すべての知的探究は、つねに「私は何を知っているか」ではなく、「私は何を知らないか」が起点となる、と述べています。そして、その中で私たちはしばしば、答えられない、根源的な問いに出会うことがあります。そのとき知性が自らに課す一番大切な仕事、それは「答えを出すこと」ではなく、「重要な問いの下にアンダーラインを引くこと」なのだ、と内田さんは説明しています。

知性の一番大切な働きは、重要な問いの下にアンダーラインを引くことだ。『寝ながら学べる構造主義』を最初に読んでから 20 年以上経ちますが、この言葉は、今でも自分にとって大切な羅針盤です。

2026 年度が始まりました。茨高生、茨中生諸君が、日々の学びを通して、真の「賢い人」へと成長していくことを願います。

(注)子どもたちの質問に答えるなかでも触れたことだが

『生きる言葉』の中で俵さんは、〈賢い人って、どういう人?〉の前に、〈子どもの真っすぐな問いに答える〉の章で、「どうしてウソをついちゃいけないの?」という小 3 女子の質問に答えています。

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。